

平成29年 1月16日

村上市議会議長 三田 敏秋 様

村上市議会総務文教常任委員会
委員長 鈴木 いせ子

行政視察報告書

下記のとおり、総務文教常任委員会の閉会中継続調査(行政視察)を行ったので、その結果を報告します。

記

- 1 期 日 平成28年10月25日(火)～10月27日(木)
- 2 調査地 島根県松江市・島根県雲南市・島根県出雲市
- 3 参加委員氏名 鈴木いせ子委員長 鈴木好彦副委員長 小杉武仁委員 木村貞雄委員
稲葉久美子委員 大滝国吉委員 三田敏秋委員 佐藤重陽委員
河村幸雄委員 (計9名)
- 4 調査項目 (1) 学校図書館活用教育について(島根県松江市)
(2) 足立美術館(島根県安来市)
(3) チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて(島根県雲南市)
(4) 定住促進の取組みについて(島根県出雲市)
(5) 出雲大社(島根県出雲市)
- 5 調査目的 (1) 松江市の行っている学校図書館活用教育「学校図書館支援センター事業」は、学校図書館の活用を通じて、子どもたちの豊かなことばを培い、主体的に学びあう力を育て、生涯にわたって生かせる情報活用能力を身につけることをめざしているが、学校図書館における司書教諭、学校司書の配置の状況、学校の担任教諭との連携、図書館システムの運営や予算等について調査し、本市の学校教育へ生かせる可能性を探ることを目的とする。
(2) 足立美術館が市や県の中で持つポテンシャルや庭の管理における環境への配慮・取組み等について調査することを目的とする。
(3) チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて(島根県雲南市)
日本の25年先の高齢化社会をいくとの危機感を持った雲南市では、「子ども・若者・大人チャレンジの連鎖」による持続可能なまちづくりに取組み、その中から、様々な課題に対して、前向きにチャレンジする人が生まれ、

少しづつ成果を生み出している。目指すのは、新しい日本のふるさとづくりであり、「課題先進地」から「課題解決先進地」へである。

雲南市が誕生して10年。今、雲南市では自分たちの地域を自ら良くしていこうと地域自主組織による地域づくりが進められ、子どもたちは、保幼小中一貫したキャリア教育により、ふるさとへの愛着心が高まり、さらに、志ある若者たちがつながり、地域課題解決に向けた活動が活発化している。村上市におけるまちづくりへ、また、違った視点からの取組の在り方について研究することを目的とする。

(4) 定住促進の取組みについて（島根県出雲市）

出雲市は人口17万人、島根県第2位のいわゆる地方都市ではあるが、わずかとはいえ、人口の増加を果たしている自治体である。

市の総合計画の4つの戦略プロジェクト、この4つのプロジェクトが今回の「定住促進の取組みについて」で。

雇用創出2,000人プロジェクト（10年で）

定住人口キープ17万人プロジェクト

交流人口1,000万人プロジェクト

住みやすさ1プロジェクト

これらの取組みの経緯や成果を調査し、村上市としての振興の在り方を研究することを目的とする。

(5) 出雲大社（島根県出雲市）

出雲市の戦略プロジェクトの出所となっているのは、縁結びの「出雲大社」である。文化財保護等の現状についてだけでなく、歴史的な存在価値、また、市の発展につながっていくような、市民の生活にも結ばれている大社の在りようを調査し、村上市での取組みについて研究することを目的とする。

6 調査概要

(1) 学校図書館活用教育「学校図書館支援センター事業」について（島根県松江市）

[対応者] 松江市教育委員会学校教育課

前田指導研修係長

城北小学校学校図書館

指導講師、スタッフ

[経過] 担当者から、資料により、学校図書館のあゆみ、支援センター事業、学校司書業務、学び方指導體系表等について説明を受けたのち、各委員からの質疑を行った。



その後、実際の学校図書館を見学するため、城北小学校学校図書館に移動し、そこで、各図書館がそれぞれに工夫を凝らして利用・活動しやすい図書配置、飾り付け、ピックアップを行っていることを見学した。とりわけ、実際に職員が配置されているという現状と図書館が児童にとって居心地のいい場所となっているということの説明を確認し、若干の質疑ののち調査を終えた。

(2) 足立美術館（島根県安来市）

[現地調査] 安来駅に移動後、当美術館の無料シャトルバスを利用し、現地到着後、各自、調査を行った。

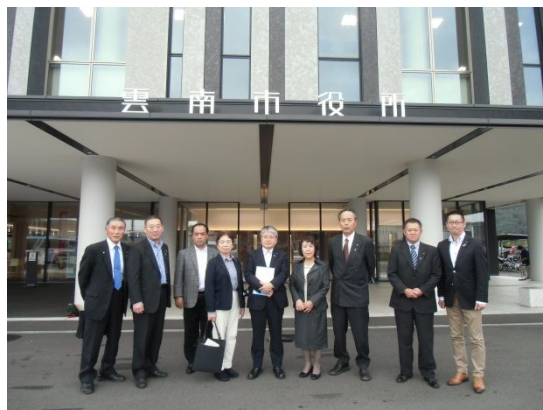


(3) チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて（島根県雲南市）

[対応者] 雲南市政策企画部政策推進課

チャレンジ創生グループ 須山雄介

[経過] 担当者から、資料により、取組みの経緯、成果等について説明を受けた。中でも全国的にも有名となった「NPO法人おっちラボ」の活動、取組みに注目させられた。また、新しい公共の創出ということで、地域が「やってくれない」から「やらせてくれない」と変化したところが増加したとのこと。各委員からの質疑ののち、移転、新築された庁舎の一部を見学し調査を終えた。



(4) 定住促進の取組みについて（島根県出雲市）

[対応者] 出雲市総合政策部縁結び定住課

内藤課長、米山係長

[経過] 担当者から、縁結び定住課が平成26年度から設置された経緯や各種事業の取組み、成果等について説明のあったのち、各委員からの質疑を行った。特に今は、出雲大社の「平成の大遷宮」に当たることもあり、その注目度の高まり、観光客の増加を終わらせることなく



定着、継続、発展させたいということで、総合計画、プロジェクト事業を全庁挙げて推進しているところであり、「縁結びのまち 出雲」の情報発信を重層的に行っているところを聞き取り、調査を終えた。

(5) 出雲大社（島根県出雲市）

[現地調査]出雲市のまちづくりの精神的なシンボルである「出雲大社」、その歴史的な文化財の保存の形態等について、各自、調査を行った。



[各委員の所感]

鈴木いせ子委員長：学校図書館活用教育について（島根県松江市）

松江市は平成23年に合併し、人口20万人を超え、平成24年には特例市となり山陰の中核都市として発展してきました。

前田指導研修係長より説明を受けました。

子どもたちとわくわくする学び方をつなぎます。！

授業者と司書教諭、学校司書の専門性をつなぎます。！

学校とそこで役立つ資料、情報をつなぎます。！

子どもたちが“わくわく”しながらことば豊に意欲的に学び合う姿は、学習指導要領に示された「生きる力」の中核である「学ぶ力」につながる。

図書館は、「読書センター」「学習センター」「情報センター」の3つの機能がバランスよく充実することがキーワードです。

村上市がこのように、授業と図書館を結び付けるには、先ず、司書教諭と学校司書の養成から始めなければならない。

足立美術館（島根県安来市）

足立美術館は島根県の登録博物館となっております。

枯山水庭、白砂青松庭は落ち葉ひとつなく、13年連続で日本一に選ばれております。

横山大観の作品を中心として、現代の日本画の名作がそろっていました。

村上市の景観はこれほど行き届いていたかと思う位、全てに目配りがありました。

これこそ村上市の観光の目指すところと感じてきました。

チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて（島根県雲南市）

日本最古の歴史書といわれる「古事記」に残るスサノオノミコトによるヤマタノオロチを退治した伝説が残る舞台であった。

堀江様のあいさつに続き、須貝様より説明を受けました。

保幼小中高一貫した「キャリア教育」

市内若者、大学生、教育系NPO等がぞくぞく雲南市の教育に参加。

若手人材を掘り起こす「幸雲南塾（大人版）」

志ある若者がつながってネットワークは広がっている。

地域自ら課題解決に取り組む「地域自主組織」

地域課題解決に向けた活動に幅が広がる。

合併交付金を利用した庁舎の新築、市民病院の建設が進んで活力が伝わってきた。

村上市も「人口減少の克服チャレンジ」を具体的に立ち上げることである。

定住促進の取組みについて（島根県出雲市）

「もしかして出雲に興味がおありですか？」

これが出雲市の定住施策の表紙に書かれている。

「出雲縁結び空港」、「出雲は縁結びの町」、「縁結び定住課」、すべては縁結び一色である。

< 4つの戦略プロジェクト >

雇 雇用創出2000人プロジェクト

10年間で2000人の新たな雇用創出を目指す。

定 定住人口キープ17万人プロジェクト

出雲市の魅力を高め17万人台維持を目指す。

交 交流人口1000万人プロジェクト

年間1000万人が訪れ、たくさんのご縁が生まれる町に。

住 住みやすさN0.1プロジェクト

住みやすさの総合的な満足を高める

村上市もたくさんのご縁にめぐまれない人が多いので、まずはバスで出雲大社にお願いに行こう。

出雲大社（島根県出雲市）

「大国主大神」(おおくにぬしのおおかみ)が天照大神(あまてらすおおかみ)に国を譲り、その時に造営されたのが出雲大社となりました。

国宝である本殿を中心に摂社、末社があり、60年に一度の「大遷宮」により文化財の保護等に努めてきました。

今年はまた、伊勢神宮の20年に一度の「大遷宮」と重なったこともあり、大勢の観光客でにぎわってありました。「2拝、4拍手、1拝」で村上市の発展と平和を願ってきました。

村上市にはお寺、お宮がたくさんある。これが観光に結び付けばと考えてきました。

鈴木好彦副委員長：学校図書館活用教育について（島根県松江市）

学校図書館活用教育に取り組む動機、取り組む前の実態、問題点。取り組むにあたっての目標と現在における目標への到達度について関心を持って調査に臨んだ。

双方のあいさつの後、松江市教育委員会学校教育課指導研修係長前田真利氏の説明によ

り開始された。説明の冒頭に学校図書館活用教育事業に取り組むキッカケについて話があり、それによると島根県知事、松江市長両首長が図書館活用の重要性を訴えて施策として取り上げ、トップダウンの形でスタートされたようである。

しかし、本事業を今日の形に成し遂げてきたのは、実務をここまで具体化し実現できたのは、やはり関係者の大変な工夫や尽力であったと説明の端々から感じられた。

松江市の実例は地域性やその時代に必要と思われたことを形にしてきたもので、そのまま当市に導入できるものではないが、このことに取り組んでいける人材の発掘とその活動を支える環境の整備が望まれる。

参考) 西日本新聞 11/14(月) 11:33配信

全日本教職員組合(全教)は7日、公立小中学校の図書館で司書などとして働く非正規職員へのアンケートを行い、92%の人が年収200万円以下だったとの結果を発表した。

調査は2015年11月から16年3月に実施、377人が回答した。

年収51万~100万円が回答者の52%に上り、101万~150万円も22%だった。時給では751~800円が最も多く28%。通算勤務年数が5年以下の人が52%を占め、自由記入の欄には契約を打ち切られる「雇い止め」への不安を訴える声が多かったという。

低待遇の一方、95%の人が現在の仕事にやりがいがあると答え、63%が正規採用を希望していることも分かった。

全教の担当者は「司書という専門知識を有する人の待遇改善を国などに働き掛けていきたい」としている。

足立美術館(島根県安来市)

美術品を展示する足立美術館のコメントは省略します。足立美術館のもう一つの特徴は、手入れのゆきとどいた庭と、その庭に配置された建物や庭石と、その背景にある借景としての近隣の山々の風景であります。その景観は、計算され尽くしたビューポイントを見事なまでに演出しているものであります。

足立美術館の庭が見せているものは、実は、日本であればどこにでもある見慣れた風景、見慣れた自然であります。ただ、見せ方を工夫をし、見せ方を制限して演出することで、あの感動を提供しているものです。

素材は、我が村上にもあります。あとはどう見せるかです、それが悩ましい。

チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて(島根県雲南市)

「チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくり」を標榜している島根県雲南市を訪問した。訪問に当たり、「チャレンジの連鎖」の連鎖のイメージ、まちづくりの中心となっている幸雲南塾の存在に注目しそのカリキュラムと活動の実例、雲南市の唱えるキャリア教育の「キャリア」の意味するものについて関心を持ちながら説明を聞いた。

まず連鎖するというイメージについては、『子ども×若者×大人』とし各ステージでの活動経験(キャリア)を断ち切らない工夫のように見える。世代ごとの活動もチャレンジ

と称して意欲を引き出す工夫と思われる。

各世代のキャリア形成はいかに意欲的な人材、キーパーソンを見つけ出すか、育て上げるかが要点となろう。そこで、注目されるのは幸雲南塾の存在であるが、塾は別法人のため市役所の管轄外のため今回の説明では十分な情報は得られなかった。しかし、雲南市の活性化は幸雲南塾が輩出した人材なくしては語れないのではないかとと思われるので、塾の活動の歴史に注目し、キーマンがどのようにして誕生するのか見てみたいものである。

定住促進の取組みについて（島根県出雲市）

定住促進の取組みについてをテーマに出雲市を訪問した。定住促進は地方都市の普遍的課題であることから、特別な施策があるとは期待していなかったが、予想どおり十七万都市における働く場所が充実している都市の事例は、この成果が得られて当たり前かなと思わせるものであった。

その中で、「出雲シティーセールス事業」を中心に一点集中、ぶれない施策展開が成果を上げているのではと感じられた。あれもこれもと総花的に手を打ちたいものであるが、愚直に一つのことを展開することにより、市民に浸透した施策として効果を上げているものと感じた。

小杉武仁委員：学校図書館活用教育について（島根県松江市）

松江市では、市内49校全ての小中学校に司書教諭を配備し、学校図書室の活用を最大限に活かした積極的な図書館教育が行われており、子どもたちに対して本を身近なものと感じてもらおうと同時に、読書意欲を向上させる工夫を継続的に実施し、読書が子どもたちにとって日々の習慣となるよう取組みをしておりました。

その結果、読書習慣から得た情報を授業などでも活用する力が付き、学習意欲を持った子どもたちが率先して問題定義を試みて、課題設定を行いながら授業に取り組んでいる姿が見受けられ、着実に学力向上の成果も確認することができるとのことでした。

図書を用いた授業においては、学級担任・司書教諭・学校司書が連携して取組み、授業内容を検証し、職員教育プログラムに取り入れて、研修時の資料として開示し、自治体全体へ発信できる取組みもなされ、常に教育現場の改善につながる取組みも感じとれました。

教職員のスキル向上に対する意識の高さを感じたと同時に、教育関係者が切磋琢磨し、図書を通じた教育の中で、未来を担う子たちを立派な大人に育もうという情熱がひしひしと伝わってきました。

学力の向上は勿論ですが、図書館に足を運び、自らが課題を設定し、調べ、分析し、具体的にまとめ、グループにて話し合うという流れは、子どもたちが成長する過程において、大人になった時でも必要とされるスキルを身につけることを最大の目的に設定していることに強く感銘を受けた研修内容でありました。

小学校と中学校が同敷地内になっている一貫校の松江市立城北小中学校の図書館も拝見

させてもらいましたが、図書館の照明も明るく、学習環境の整備が驚くほど充実していたことに関心を多く持ちました。

全国平均では図書館の利用が平均週2回のところ、松江市では週5回という説明でありましたが、学力レベルにおいても全国平均と県平均を上回り、自己学習習慣も定着しており、近年では成果も見られるとのお話に、広大な面積を有する村上市においても、各地区単位での学校や図書施設を利用したエリート学習の取り組みを進められるのではないかと感じた次第です。

学校図書館は教育のインフラと捉えており、積極的に整備を充実させ、学校の授業でも頻繁に利用し、子どもたちが自分たちの努力において、思考力や判断力を養えるキャリア教育を推進していく事が望ましいと考えます。

足立美術館（島根県安来市）

足立美術館では、館内も拝見させていただきましたが、横山大観や北大路魯山人をはじめ、日本を代表する多くの美術家の作品が展示されており、全国各地より観光客の方々も多くいらっしゃっておりました。

足立美術館は、約1,500点の美術品を所有しており、四季に応じて年4回展示替えを行っているとのことでした。また、館内の日本庭園は日本庭園専門誌「ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング」において、13年連続で日本庭園ランキングが1位だということでしたが、様々な工夫を凝らしており、窓枠を額に見立てて、絵が設置されており、コラボレーションを魅せるという志向が凝らされていて、四季を感じる生きた絵画は、素晴らしい芸術を目の当たりに感じる事が出来ました。

庭園の維持・管理は、職員でもある庭師が、年中無休で対応しているとのことで、広大な日本庭園を常に良好な状態に保つよう心がけていました。

このような取り組みの結果、フランスの旅行ガイドブック「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」では、山陰で唯一三つ星を獲得しており、外国人来館者も年間1,000人程度しかなかったが、約15,000人の方に足を運んでいただけるようになったとのことでした。

民間の美術館という事もあり、営業部を中心としたインバウンド対策をはじめ、旅行会社や交通機関などに通年で働きかけを行い、来館者の誘致を図っている取り組みがなされており、駅からの無料のシャトルバスも運行されており、利便性を高めている効果もあるのか、アンケートなどの統計では、来場者の4人に1人がリピーターであるとのことでありました。

観光資源に恵まれている村上市においても、観光客の誘致は今後も大いなる課題であり、美術品の展示や庭園の管理を民間の力で行っている、足立美術館の取り組みを調査できたことは、村上市の観光誘致においても参考になるものでありました。

村上市全体の都市計画ビジョンなども検討も含め、観光誘致においては民間と行政との関わりを更に強固なものとし、城下町村上市のブランドを全面に出したまちづくりに取り

組み、大切な財産として後世に継承していかなければならないと感じました。

チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて（島根県雲南市）

雲南市では、近年において人口減少に歯止めがかからず、現状においても高齢化率が36%と全国的に見ても数値が高く、なんとか早急にくい止め様と、行政やNPOなどの民間団体との協働でプロジェクトチームを立ち上げ、安全・安心で持続可能なまちづくりに向けた取り組みを進めおりました。

その中で、チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりプロジェクトがあり、子ども世代、若者世代、大人世代と三世代に振り分け、市民の皆さんがリアルに行政の仕事に関わり、自分たちのプライドでまちを生かしていく、という気概で取り組みに挑戦しておりました。

ひとつの事例を紹介しますが、地元密着型の有望な若手の人材を育てる目的を設定し、幸雲南塾というものを立ち上げ、本気で地域を愛し、豊かな未来をつくる若者を地元の力で育成しようという活動しておりました。

若者の起業や家業の継承に向けて、目に見える形での成果を出し、地域全体の活力を創造する事業を展開しており、行政が民間のNPOと手を携え、まさに一体となったまちづくりプロジェクトが実践されており、各世代のチャレンジが雲南市の活性化に直結しており、地域を元気にする仕事がしたいという具体策を盛り込んだ活動が、未来をつくるチャレンジャーを生み出す仕掛けとなっておりました。それぞれの活動は自ずと活力を向上させ、横の繋がりが拡大して、地域を巻き込んだ課題解決に向けた動きや、若手起業家の育成に繋がっていました。

我が村上市でも合併から8年が経過しましたが、人口減少の問題は大きな課題です。地域を創るのも守るのも、人が育ち仕事をする場が創られ、そこから初めて良いまちづくりを進められるのだと思います。若者のUターンにもつながる雲南市での取り組みを知り、とても良い勉強となりました。

村上市の人口減少における課題をクリアにする為にも、しっかりと数字においても目標を設定し、未来に対して責任のあるチャレンジが生まれるよう、多様な取り組みで連鎖を創り出す必要性を感じました。

定住促進の取り組みについて（島根県出雲市）

出雲市は全国でも異例の人口増加を実現した自治体でもあり、昨年度においても91人の増加となったとの事でありました。少子化と人口減少問題は全国どの自治体においても喫緊の課題ですが、神の國 出雲として全国に知られている出雲市にて、定住促進の取り組みについて、担当の職員からご教示いただきました。

出雲市の取り組みでは、縁結び定住課を設置して、縁結びの神様である出雲大社を有効に活用し、徹底した定住推進事業を行っており、出雲ブランドの強化と発信、出雲市民と協働で地域の魅力をセールス、結婚促進対策、全職員での出雲市PR活動、出雲縁結びホームページを活用しての情報発信と、行政においても多くの取り組みを進めており、人口減少ストッ

ブを提唱し市職員が率先したプロジェクトを実現しておりました。

U I Jターン者に対しての、徹底した支援と取り組みを行っており、空き家などを活用したりリフォーム済の家屋提供、子育て世帯、3世代同居世帯、3世代近居世帯、新規2世代同居世帯、新婚世帯への助成金支援、空き家バンクを活用して定住推進、U I Jターン者への情報提供、ホームページでの縁結び幸せサービス活動を実施、観光大使に、はるな愛さんが就任していただいたのをきっかけとして、全国放送のナイナイのお見合い大作戦を誘致するなど、多くの取り組みをされており、担当課での取り組みの多さに圧倒されたのが正直な感想でありました。

しかし、ここまで徹底した取り組みを進めなければ、人口増加に結びつかないのかもしれないと感じとった次第でもあります。

市の統計では、U I Jターン者も20歳～50歳の方が多く、生産年齢人口に該当する方のターンは、自治体の力に直結すると力強くおっしゃっていましたが、まさに地域の可能性が明確な形として捉えられるのではないかと感じました。

出雲市独自の就職斡旋も実施しており、地元事業者との連携で、雇用促進対策も活発に行なっており、U I Jターンをする若者からも安心して定住を考えられると高評価との事でした。ふるさと納税でも8000件で2億円という事で、年々増加傾向にあるとの事でしたが、今後は更にPR活動をして出雲市ブランドの発信強化に努めるとの事でありました。

村上市では毎年約800人が減少しているのが現実であり、人口増に結びつけることは困難かもしれませんが、何もしなければ減少を食い止めることさえも困難です。

自分たちのまちを大切に思い、守りたいのは出雲の人も村上の人も一緒だと考えます。市民一人ひとりがこのまちに生まれて良かった、住んで良かった、子や孫に自信を持って伝えたい、誇りを持って語り継いで生きたい。ビジョンを明確にした実行は、これからの村上市にとっても大切な事だと感じてまいりました。

出雲大社（島根県出雲市）

出雲市には出雲大社という観光資源があることから、ネームバリューを最大限に活かしたシティセールスを展開しており、平成の大遷宮を契機として、出雲の注目度が高まり全国から大勢の観光客が訪れ、大きな経済波及効果が感じられます。

今月と来月はご当地出雲では神在月といって、旧暦の10月にあたり、全国の全ての神様が集まる場所が出雲大社であり、平成の大遷宮が約60年ぶりに行われる年でもありました。

出雲大社本殿は、1952年に国宝に指定され、2004年には出雲大社として神殿21棟と鳥居が重要文化財として一括指定されており、大国主大神は縁結びの神、幸福の神として祀られており、全国から年間200万人の参拝で賑わっているとのことでした。

本殿をはじめとする神殿は、歴史的な重みを感じるのは勿論ですが、神々しい聖地に参拝できたことは、日本人として新たに誇りを胸に刻んだ経験となり、この度の行政視察の学びの大きさを感じる事となりました。

大社前の出店通りでは、平成の大遷宮に合わせ、インフラ整備に着手し、5年前に全面リニューアルを実現化しており、駅から出雲大社までの散策も楽しめるよう、観光客誘致に行政と民間が協働で取り組みを進めてきたとのことで、平日にもかかわらず多くの参拝客で賑わいを見せておりました。60年に一度という大遷宮を観光誘致のチャンスと捉え、観光客の定着を目指している姿勢に出雲市の魅力と暮らしの情報を様々な手段、媒体を活用して積極的に発信していることは村上市においても学ぶべきであると感じました。

出雲市には出雲大社という目玉があり、その宣伝力は絶大であります。宿泊して観光するといった、いわゆる滞在型観光になかなか結びつかないという問題も抱えているとのお話で、村上市においても近年では四季を通して似たような状況があり、宿泊を伴う観光戦略と対策を模索していく必要性を感じてまいりました。

今後この度の研修で学んだことを活かすべく、観光産業を活性化できるような方策を考えていきたいと思えます。

木村貞雄委員：学校図書館活用教育について（鳥根県松江市）

松江市では単なる図書館ではなく、「読書センター」「学習センター」「情報センター」の3つの機能がバランスよく充実させている。

授業づくりも協働で（司書教諭）（授業者）（学校司書）と3者が連携を取り、きめ細かに子供の学びを育てている。

学校図書館支援センターは、まさに「つなぐ」をキーワードに取り組んでいる状況です。学び方についても、たて、よこの連携を取りながら指導し、バランスの取れた教えを行い、非常に力を入れていることに感心しました。

学校司書については、49人で、嘱託25人、パート24人と人件費も力を入れているが、松江市の一般会計の中で自主財源が40%もあるが、地方交付税も22.7%あり、交付金事業で行っているようであります。

補助事業を活用した人材育成の良い事業であると思えます。

村上市では現在、学校統合を計画しているが、実施するようであれば統合を見通した考え方で、また、今までもそうですが、退職した教師のボランティア的な、志のある人材を確保しなければと考えます。

足立美術館（鳥根県安来市）

美術館の文化財については、すばらしい展示であると感じました。

特に魅力的だったのは、自分の好きな絵に一票を投票できた展示があったところ。

景観保全については、和洋を組み合わせた庭で、芝のみどりがきわだったきれいな景観で、特に女性に喜ばれるような庭です。このスケールの大きな景観が観光客を呼び込む力が大きいのかと思えました。新潟県内にも美術館はあるが、景観と合わせるとなると、場所と面積がかなり必要かと思えます。

村上市の取組みの可能性については、本市はやはり、歴史的な文化財展示と景観を合わせた

ものがよいと思います。

チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて（島根県雲南市）

雲南市では、国の地方創生交付金を活用した総合戦略の計画・実施が早いことに、先ずは感心しました。

その中で、1つは20～30代の課題解決型人材の増加ということで、「子ども・若者・大人チャレンジ」を中心とした新プロジェクトと、もう1つは、子育て世代の流出抑制・Uターン人口の増加ということで、定住基盤整備（新規拡充事業）を合わせた戦略である。その中で、3つの取組み（保幼小中一貫したキャリア教育）（若手人材を掘り起こす大人版）（地域自ら課題解決に取り組む地域自主組織）を実施している。

大人版（幸雲南塾）では、5名の起業家も誕生し、全国14ヶ所へも拡大している。今後、年々、雲南市へ移住し、起業家も増えていくことを期待しています。

本市における取組の可能性については、各事業の予算確保が厳しいのではと思います。また、総合戦略の中で、前期5年間の平成30年までの人口減少をプラスにするという目標を立てている。

幸雲南塾（大人版）を立ち上げることにより、社会起業や、地域貢献を志す若者も増え、若者のネットワークが拡大し、塾生も増えていくのではと思います。

この中で、塾の卒業生が中心となり、「NPO法人おっちラボ」が誕生し、地域活動を支援しているのが一番良いのではと思います。

起業が誕生し、移住して就農研修中の塾生もいるということで、今後も増えていくことを期待している。

本市での取組み可能性については、その前に魅力ある村上市の中身を市、内外に発信するのが先で、そして、志ある若者の組織の立上げと勉強会から始めなければと思います。もちろん、予算の確保は必要です。

定住促進の取組みについて（島根県出雲市）

出雲の真のブランド化、定住促進支援、縁結びと、3つを繋ぐことで大きな効果を出している。

島根県では人口減であるが、出雲市は減少していない。90人増である。定住促進のための固定資産税、リフォーム、新築と補助事業は他の市でもありますが、定住相談課の相談で、就職の相談が一番多いということです。

定住促進空き家活用事業では、財源が大きな課題であるとのこと。Uターン女性支援事業では、独身の女性に支援する事業ですが、追加では増えたけれども、結婚することで辞退した方、4名もあり、複雑な事業であると感じました。

本市での可能性については、雇用の場確保と就職の相談が課題であると考えます。

稲葉久美子委員：学校図書館活用教育について（島根県松江市）

学校図書館は学校教育のインフラとして子供たちの学び方を学ぶ学習として取り組まれている。

学校図書館活用教育としてスタッフを揃え、「読書活動として基本的には読む力を育てる。授業に役立つ資料を準備し、学習活動を支援する。系統的に情報機器やネットワークを活用して、情報やデータを扱うための知識や能力を身につけ、パソコンの操作やデータの情報の整理や発信ができるようにする。」ができるように教育する。

スタッフは指導主事3名(指導研究係長、国語教師)(社会、ICT担当)(国語教師、小、中一貫校担当)指導講師(センター事業の運営、司書教諭への指導助言)スタッフ2名(データ集積、学校司書への指導助言)(物流担当)の大勢で担当している。

現在から将来を見据えたキャリア教育が一貫して取り組まれ、図書館活動に本腰をいれている教育に感銘を受けた。

何処の学校でもやれることではあるが本当の意味で本腰を入れて取り組むことになれば、スタッフはじめ大変な人材を要することになるので、村上の人材不足はいろいろな分野でも言えることである。地域で育てなくては人材は生まれないので教育に資金を投入することを期待します。

足立美術館(鳥根県安来市)

足立美術館内から見た庭園も見る方向が違うとまた別の景色となり、それぞれに目をたのませてくれた。美術館内も見事に整備され、一流画家の名作もすごかった。

歴史と地域の心意気が表れている素晴らしい。

テレビでも全国に発信されている名実ともに日本一であった。

横山大観を中心とした近代から現代の日本画の名作1500点を収蔵。5万坪の日本庭園は、米国の日本庭園専門誌「ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング」による庭園ランキングで、13年連続日本一に選ばれています。

チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて(鳥根県雲南市)

平成27年度の人口39059人、5年間で94,1%の人口に減少、52年度では65%に減少するという予測のもと、歯止めのかからない高齢化率は全国トップランナーの雲南市で人口減少の危機感から「人口の社会増」への取り組みを始める。

平成30年には社会増減をプラスにしていく目標をたて、地方創生交付金を使っての子供から若者、大人までのプロジェクトを立ち上げる。20歳~30歳課題解決型人材の増加を目指して(持続的な人口増、)安住基盤整備を進め(新規拡充事業)子育て世代流出の抑制し、UIターン人口の増加をめざした。

子どもからキャリア教育を一貫して取り組み、若手人材の掘りおこし、地域それぞれで自主的に組織化し課題解決に取り組んできた雲南市の成功例だと思った。

人材を育てることはどこかの単独ではできない。

小学校からのキャリア教育と大人の人材の掘りおこし、若手を信頼しての取り組みが大きい。

な成果を期待できる。どこでも本気で取り組むなら期待できることだ。

村上で言えば旧市町村で支所の役割を大きくして地域に責任の持てる仕事をさせることだと思う。村上にいて山北のことを思っても始まらない。

定住促進の取組みについて（島根県出雲市）

出雲市も雲南市も同じことだと思う。地域の差があるので何もかも一緒ではないが、やることは同じだと思う

出雲大社（島根県出雲市）

偉大すぎてわかりませんが歴史と人と支える力の大きさにただ驚きました。

大滝国吉委員：学校図書館活用教育について（島根県松江市）

当日は、先ず、委員長から、お隣りである鳥取県で起きた地震に対するお見舞いの言葉から始まったが、幸い、松江市は震度4であったが被害なしとのことだった。

「学校図書館支援センター事業」についてということで、担当の前田指導研修課長さんから、説明を受けた。事業の目的は、学校図書館の機能を活用して、主体的に伝え合い、学び合う力を育てるということです。

特徴的なのは、学びをつなぐということで、授業で使える図書館にすることです。単に、読書をすればいいということではありません。本を何冊読んだかにとどまらず、子どもたちは、図書室のどのコーナーに何の種類の本があるかを知っていて、それを使って、主体的に調べ物をし、そしてみんなの前で発表まで行います。そこには、いつでも図書館が利用でき、利用できるだけでなく、司書教諭、学校司書が常にそれをサポートする体制を作り上げている。そして、そういった授業を行うに当たり担任教諭の負担を減らすべく、司書教諭、学校司書はそちらへのサポートの為、資料作りや当日の授業の支援まで行っている。また、各図書館の蔵書の相互利用を進め、利用図書の集中をなくすため、業者による物流ネットワークまで構築している。そして、これらがうまくつながっていくために絶えず研修会や研究を行っているとのことであり、費用のかかることではあるが、人材を育てるということはお金と手間暇のかかることであることを再確認したし、しっかりとした信念とゆるぎない志なくしてはできない取組みであると認識した次第である。

村上市としても、学校教教育で読書の習慣をつけることは取り組まれているようだが、課題解決や、「知る 見つける つかむ まとめる 伝え合う」という「学び方指導體系表」までつくられ、それを小中一貫の基本カリキュラムとして取り組んでいるところに、まさに、子どもたちに人生を生きていく上での「生きる力」を付けさせて卒業させていることを感じ、大変、参考になったところでした。

足立美術館（島根県安来市）

足立美術館は、島根県の安来市、あの有名「安来節」の市に在ります。

創始者である 足立全康 氏についての生涯とこの足立美術館に寄せる思いについては、会館に入ってすぐのところに記されておりますが、その名画に寄せる並々ならぬ情熱、人と

してその一生を何のためにどう生きるかについても語っているかのようでした。

また、「庭園もまた一幅の絵画である」との氏の言葉通り、見事としか言いようのない庭でした。この一流の美術品の数々と、日本一の庭、そしてその日本一ならしめている庭の管理。庭の管理は敷地内の庭だけに限らず、本来、借景となるばかりである後背の里山や山林にまで管理の手を広げているとのことでした。

村上市がこのレベルのものを持つということは困難としても、この足立美術館のすばらしいところは、青少年に対する優遇措置として、小中学校の学校教育の一環として教師等が引率し利用する場合は事前申し込みにより入館料を無料としたり、また、公立学校が休業日となる土曜日には、小中高生の入館料を無料とするといったことをしていることです。

チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて（島根県雲南市）

今回の調査項目は、雲南市が「雲南市の挑戦」ということで、平成H27～H31までの5年間で取り組んでいるものです。

地方創生交付金を活用した、「子ども×若者×大人チャレンジ」を中心とした新プロジェクトを行うことにより若い課題解決型の人材を増加させ、加えて、定住基盤整備により、子育て世代の流失を抑制し、UIターン人口を増加させる。そして継続的な「人口の社会増」を図ることが、雲南市の挑戦であり、人口の社会増への挑戦である。

中でも、この子供から大人まで、それぞれが課題を自らが何とかすべくチャレンジしていくことにより、生き生きとした生活が送れ、なおかつ、そういった取り組みが近隣市や全国、また、有名大学からまでも関心呼び若者が入ってくる。そのことにより、子どものキャリア教育が花開き、外に出ても帰ってきたいと声が出てくるようになり、若者の起業を呼び、地域を単位とした住民の自主的活動とつながりを作り出していく。

これらは、全国的にも評価が高く視察が押し寄せているところであるが、わが村上市でも、市の持続的発展には、やはり、住民が市が動くのを待つのでなく、逆に、「これを、やらせてもらいたい」というところまで持って行く必要があるのではないかと思われました。

定住促進の取組みについて（島根県出雲市）

出雲市は、出雲未来図としての出雲市総合計画を作っています。

出雲市の将来像を、「げんき、やさしさ、しあわせあふれる 縁結びのまち 出雲」として、H24年度からH33年度までの10年間の6つの基本方針と4つの戦略プロジェクトを示しています。この4つの戦略プロジェクトが今回の調査項目となる「定住促進の取組みについて」であります。

雇用創出2,000人プロジェクト（10年で）

定住人口キープ17万人プロジェクト

交流人口1,000万人プロジェクト

住みやすさ 1プロジェクト

特徴的なのは、全庁挙げての取組みとして、先ず、出雲の日本一（雲太、高さ日本一の

灯台、日本最大の木造建築ドーム、銅剣の出土数日本一など)を常に頭に入れておいて、誰に聞かれてもすぐ答えられる。情報発信する。そして、出雲という市をシティーセールスする。

それは、本当に全庁を挙げてですので、観光担当課だけの取組でなく、全ての課が全国に良いご縁を結ぶべく、次々に取組みを繋いでいく。

今回の視察項目の担当課は「縁結び定住課」というところですが、平成26年度に設置されたかです。定住促進のための各種助成事業等は各市でもそれぞれ行っているところですが、出雲市ではとにかく、いたるところに、「縁結びのまち 出雲」と使われていて、市の事業やストラップ、はてはコースターにまでシールが張られています。この心がけが隅々にまでいきわたり、いろいろな事業を展開しているところに、村上市でも参考とすべきところがあるなと感じてきました。

出雲大社(島根県出雲市)

60年に一度の式年遷宮で伊勢神宮との重なった年に訪れることとなったものであるが、しかも、神在月の10月で、この月、市民は、日本全国の神様がおいでになるということで、歌舞音曲は控えるとのことでした。しかし、大社前の神門通りは多くの参拝客、観光客でにぎわいを見せていました。

国の元、礎となる神社ですので、遷宮を含め、維持・管理は大社で行われ、多くの寄付や浄財でまかなわれているわけですが、近くには、県の博物館や美術館、市の交流館などが配置され、また、一畑電鉄の駅もあることから、古くから人を迎え入れ、もてなし、また、何度でも来てもらうという精神が形となって表れている、巨大空間を形づくっている印象でした。

人々の精神のよりどころとしての超強力なパワースポットですので、簡単に村上市に同じ形式を持ってくることなどかなうべくもありませんが、情報発信し、迎え入れ、おもてなし、また、訪れていただくというよい流れの構築による、村上市の持続的発展は、市の持つ豊富な地域資源と人情で十分可能となると思いました。

三田敏秋委員：学校図書館活用教育について(島根県松江市)

当事業の目的は、各「学校図書館の活用を通して、子どもたちの豊かな“ことばを” 培い、“主体的に学びあう力を育て、“将来にわたって生かせる” 情報活用能力を身につけることを目指す。」とされています。

事業の取組みに当たっては、やはり市として、県として、どういった人間を育てるかというはっきりとした考えがあり、それには、どういったシステムが必要か、そして、どういった人材を充てていけばいいかを、しっかりとした予算付けという裏付けをもって、長い月日をかけ、ぶれずに、一貫して進めてきたということが理解できましたし、当村上市、また、新潟県としてどう取り組んでいけばいいのかを考える機会となりました。

また、島根県という県の歴史・風土が育てたといっているのかかもしれませんが、その県民

性というか、確かに人口減少問題という全国的な課題は同じようにあるとしても、なにかゆったりとした時間が流れ、付和雷同して右往左往することなどないかのような県・県民ではないのかなあというような気持ちを持ちました。

足立美術館（島根県安来市）

足立美術館の文化財展示については、確かに、横山大観など、日本・世界の誇る絵画や美術品が展示されていますが、その他にも、地元の誇る陶芸家の作品やまた、県展作品などの展示もあり、何度、訪れても飽きることの無いものとなっています。

また、足立美術館の見せている庭は、確かに、見事に計算されつくしたかのような庭の見せ方をしていますが、その奥に、里山の管理された景色までが、作品とされていることに感心致しました。

当美術館も当初や途中でも入園者の少ないことや減少などにより存立の危機にあったこともあったとのこと、工夫や情熱などにより、運営の好循環を生んだことは村上市の取組みにも通じるものと考えます。

チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて（島根県雲南市）

雲南市は、高齢化率が全国のトップランナーということで、その危機感から、雲南市総合戦略～人口の社会増への挑戦～ という取組みを始めたとのことであったが、話を伺えば、その人口減少数は、わが村上市の方が大きいということであり、村上市もいち早く人口減少問題に取り組んだとはいえ、このように全国から数多くの視察を受けるまでには知れ渡ってはいないところであり、むしろ、村上市での危機意識の少なさがあるのではと思われたところであった。

「チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくり」ということで、『子ども×若者×大人』そして地域が、それぞれに取組みを行うとともに、それぞれの活動にそれぞれがかかわっていく、もしくは、かかわりをもって連携していくことで課題を自らが解決していく。

否が応でも、人口減少は、国全体としても、しばらくは、容易に避けられない中で、課題の解決は役所の中にあるのではなく、自分たちの中から出てくるものだと認識を生み、結果として、自治体として存続していくという姿を見せていただいたことに、広大な面積を抱え、集落が散在するというわが村上市でも、今後の取り組み方の一例を指し示していただいたと思いました。

定住促進の取組みについて（島根県出雲市）

出雲市のまちづくりの基本方針は、地域全体のクオリティを上げ、真の意味での出雲のブランド化に取組み、全国に誇れる都市、「げんき、やさしさ、しあわせあふれる 縁結びのまち」の実現をめざす、です。

島根県第2の都市として、有名な出雲大社などを有しているとはいえ、人口は増加しており、企業は在り、危機感などとは無縁と思われ、むしろ、うらやましいとさえ感じる市でありながら、それに安心することなく、危機意識さえ持って、全庁をあげて「出雲市シティー

セールス事業」に取り組んでいる。この事業により、出雲の魅力をもっと向上させ、持続可能な発展を続けようと市全体として取り組んでいるものである。

今回の定住促進の取り組みについては、担当としては、「縁結び定住課」がH26年度から進めているものであるが、やはりこの定住促進も先のシティーセールス事業の一つとして取り組まれており、全ての取組みが、出雲市を全国へPRしていく「しごと」ととらえ進めているとのことであった。定住促進事業でも、定住促進住まいづくり助成や移住推進住まいづくり助成、空き家活用事業など、きめ細かに、そしてそれぞれの事業がつながって、これでもかという位の取組みと情報発信をしている。

人情をキーワードの一つとしている我が村上市でも、出雲市の全国ブランドの「縁結び」を、見える化して、更に全国に広げようとしているところに、村上市でもまだまだ、おもてなしとして見習うべきところがあると感じたところでした。

出雲大社（島根県出雲市）

日本の国づくりの元、神話の世界の話かと思いきや、現代まで脈々と流れ、われわれの心に寄り添ってきた精神に触れることができた思いでした。

時代の中央から十分な財政的援助が受けられなくなったときに、情発発信として、全国に、出雲詣でを広め、町を発展させ人々の暮らしを潤してきた。その精神が出雲市民のバックボーンとして人としての在りようを支えてきているのではないかと感じました。もちろん、大社が市を守っていることは疑いないことであります。

精神論だけで市の発展は語られないといわれるかもしれませんが、市の歴史を深く理解し、そして誇りを持って日々の暮らしをつなげていく、そのことが、礎となって市は発展し持続していくのではないのでしょうか。

佐藤重陽委員：学校図書館活用教育について（島根県松江市）

学校司書を配置することにより、常に人の居る図書館にする。行けば優しく受け入れてくれる。図書館に子どもたちが集まりやすい仕掛けだと思います。

学校司書が授業の中に入り、教諭、司書教諭と協働授業を行う。
各教科教諭が課題を設定し、司書教諭が教材の準備を行い、学校司書が資料の準備をする。
三者が連携して協働授業実践し、評価・振り返りを行う。
子どもたちにはとても分かりやすい授業になっていました。

村上市で協働授業を今、導入する事は無理ですが、まずは学校司書の導入、採用を進めることができると考えます。

チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて（島根県雲南市）

特に若者に向けた、塾スタイルの取り組みは1期～5期の卒業生を輩出し、起業、家業継承者が出てきた。市民の行政に対する「やってくれない」不満から、行政が市民に「やらせてくれない」不満に変わってきたとの事。すべてがそうではないと思うが、市民からそういう声上がることは素晴らしい。

今、この取り組みが全国に波及してきている。村上市も良いことは研究すべきと考えます。
定住促進の取り組みについて（島根県出雲市）

出雲ブランドを育てる。

定住促進を最大限支援する。

縁結び(結婚対策)を行政が中心になり応援する。

上記、各々効果と関連を活用し効果を上げる。

市内工業団地にある優良企業5・6社があり、働く場は確保され、企業との連携も図り事業の効果が大きい。その成果としてU・Iターンの中心が20代、30代である。

特に変わった事をしている訳ではない。ただ、形だけでなく力を入れて本気で取り組んでいる。

村上市も同じような取り組みをしているが、効果が今一つである。

危機感と本気度の違いでないかと感じてならない。

河村幸雄委員：学校図書館活用教育について（島根県松江市）

松江市では「教育文化都市」をまちづくりの基本理念として掲げ、学校図書館を活用し、小中学校全体に学校司書を配置し、電算化、環境整備、読書活動の充実を図った事業を進めている。

学ということは、自らが本を読むことであり、貴重なもの、自らが才能があるか、どのように興味があるのかは本人もわからないが、本を読むことにより自分を発明することができる。大切なことである。

この事業により、保護者はもちろん、松江市民も目標を持ち、意識が変わってきた。明らかに全国平均を上回る。図書館に通う児童生徒の数が増えた。

厳しい財政状況であろうが、図書購入費も削られるべき中、このような事業により、図書館の相互の貸借、学校司書と子どもの関わり、共有する時間、市内の資料資源の共有により、問題点も数多くクリアーしている。

村上市での取り組みの可能性として、学校司書配置へと(村上市は一人もいない状況)モデル校として1校でもチャレンジしてみてもどうか。学力向上のみのために行う事業ではなく、子どもの発達段階が大切とのこと。

質を高める。本を読むことによって人生観が変わる。子どもを育てる。

教育の原点であり、村上市も進めたい

足立美術館（島根県安来市）

このような田舎に、これほど見事な庭園があることに驚いた。

足立美術館の魅力はたくさんある。世界が認めた庭園。50000坪の日本庭園。枯山水庭。白砂青松庭。苔庭。池庭。庭園ランキング13年連続日本一に選ばれる。

日本画と日本庭園の調和、美の感動に接し、四季の美に触れられる。また、日本画、年に4回の展示替え、茶室も多く、広い庭園を歩き、疲れたら休憩場所としておすすめ。すれ違

う人の8割が外国人なのも珍しい。

庭園もまた一幅の絵画であるという信念。芸術の感じ方はそれぞれである。

庭園は季節によって景色が変わる。朝と夕でも変わる。魅力、アイデアは数多くある。もう一度見に行きたいね。一日かけて楽しむことができる。これだけ見事な庭園、日本画を見て、素敵な場所でお食事ができて、買い物ができる。これでもかという位の提案。変化が素晴らしい。知恵を絞って村上の観光につなげたい。

チャレンジの連鎖による持続可能なまちづくりについて（島根県雲南市）

市内でチャレンジする、子ども、若者、大人がつながり合う場として連鎖する。それぞれの世代で取り組まれている活動を発表し、学び合い、深めていった事業となる。

子ども 「中高生の幸雲南塾」、学習意欲や学習プランニングを醸成、対話を通じて自分の生き方を見つける。「地域課題研究」、皆で解決方法を探る。

若者 地域と協働により夢実現のため展開中。連携しながらコラボ事業拡大。

大人 大切な商店が閉店。地域で運営する。マーケットを開設。地域の買い物、移動支援と生きがいの場に旧小学校舎を早稲田大学の協力を得て交流センターに改修。地域内外の交流・拠点施設となった。このような連鎖により、まちづくりを進めている。

いちばん大切なことは連携。市民を巻き込み、学び、ふれあい、子ども達、学生、若者の力やアイデアが必要と思います。市民と行政が一体となり、様々な問題、人口減少、若手人材を掘り起こす。子育て世代の流出抑制、Uターン人口増加につなげていきたい。村上の郷土愛で！

定住促進の取組みについて（島根県出雲市）

出雲の定住推進に上げる4つは、出雲のブランド化 定住推進 縁結び(結婚対策) ふるさと寄附金である。

移住をサポートする方法・区別として、働く場 農業 住まい 子育てに分けられ、このことを実現するためのサポート事業として、女性支援事業 移住助成 定住促進助成と考える。定住促進により大きな効果・成果が出ている。

出雲市の定住データ・Uターン件数の状況は若者が多く、20～29歳が一番多く、30～39歳が2番目とのことから、この町を選んだUターンの理由は、一番が就職先、2番目は家族のからみとのことであった。この結果から出雲市は、若者が戻れる雇用のある、大きな働き場所が多いとのことです。人口減少問題においても、昨年、98人増えた。

村上市において取組みの可能性として、一つとびぬけたものではなく、アクセス、人口の規模、自然環境、ブランド、産業、観光、人材、バランスがとれた町でなければならないが、一番は雇用のある場であろうと思う。

もっとアイデアを出して村上市を発信しなければならない。出雲の魅力、一番の良さ、誇りは、人の好き、ぬくもり、人付き合いと言っている。ここにヒントを生み出したい。

出雲大社（島根県出雲市）

神話に主人公になれる、大国主大神祀られる出雲大社を参拝。2礼、4拍手、1礼での参拝で始まった。4つの鳥居をくぐって参拝。全てをくぐってこそご利益があるとも言われている。1年に1度、神在月のこの月に、全国の神々が出雲の地に集まるとのこと。そのご利益にあずかり、良いご縁が結ばれますよう、大鳥居をくぐり松並木の参道を進んだ。夢ある物語を感じる空間であった。60年に一度の「御遷宮」に伴う御修造。ここからも、この土地の産業が活性し、雇用も生まれ、人が集まる。こんな町だからこそ、観光客が、または住人で住みたい町、定住してみたい町へとつながっていくのでしょうか。

また、出雲市全域に、大社にもまさる神社、寺、街道が、あまたの歴史、文化遺産が息づいている。日本の国造りの原点を感じる。

村上市における可能性としては、文化財指定と市民の調和がなくしてこの良さを守ることができない。観光には、物語、ストーリーが大切であり、出雲にはロマンも感じる。常に観光客に対応できる勉強を市民が心がけることが大切か。市民の意識が、文化財保護、村上大祭国指定、歴史的風致維持には必要である。